欠損フェチな欠損ちゃんのオナニー事情

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
欠損フェチな欠損ちゃんのオナニー事情

【Ｎコード】
Ｎ８９００ＨＰ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
自分の断端をオカズにオナニーに耽る欠損ちゃんとかかわいくないですか？
※この作品は以前ｐｉｘｉｖに投稿したものと同じ内容になります

左手を伸ばして右腕の断端を優しく撫でる。脂肪でぷにぷにした断端は触っていて気持ち良く、断端の方から感じるくすぐったさも相まって少しずつ興奮が高まっていく。

「んっ……」

段々とえっちなスイッチが入ってきた私は、断端を撫でている左手の動きを鷲掴みへと切り替え、柔らかい断端をモミモミと揉みしだく。左手の手のひらに断端が当たる感触や、短くなっている右の二の腕が左手の指に包み込まれる感触は、もう私に右腕が存在しない事を明確に伝えて来る。

「私の右手、もう無いんだよね……」

頭では右手の指を動かしているつもりなのに実際に指が動く感覚が返ってこない、肘を曲げ伸ばししようと力を入れても断端がピクピクと僅かに動くだけ。もう私には右腕が無い、二度と何かを掴んだりが出来ない、この腕が一生元に戻ることは無い……それら当たり前の事実に喪失感や悲しみを感じれば感じる程、それ以上の興奮が呼び覚まされる。

積み重なっていく興奮に我慢ができなくなった私は、テーブルの角に股間を押し付けた。断端を揉みしだきながらの角オナ、最近の自慰はいつもこの体勢でやっている。

「ふっ……あっ…………はぁっ」

自分だけの部屋に火照った声と息遣いが響く。断端への愛撫によってすでに濡れ始めていた私のおまんこは、グチュリグチュリといやらしい音を立てて直接的な快感を送り込んでくる。

「もっと……んぅ……もっと……」

さらなる快感を求めてグイグイとおまんこを押し付ける。左手の動きもどんどん激しくなり、断端を強く握りしめる。断端の奥に埋まっている骨のゴリゴリとした感触すらも、今の私には興奮を高める材料にしかならなかった。

「あはっ、腕の骨もこんなに短くなってる……」

視界の端に陶器製の壺が見える。それは私の右腕の骨が入れられている骨壺だった。今触っている短い骨の続きは全部あの壺の中に収められていると思うと、股の疼きが一段と強くなる。
自分の腕の断端や骨壺に入れられた骨をオカズにするなんて我ながら変態だとは思うが、興奮してしまうのだから仕方がない。

「んっ、いいっ……きもちいいっ………あぁっ！！」

机にうつ伏せに倒れ込むような勢いでおまんこを擦り付け、断端を全力で握り潰すようにして私は絶頂を迎えた。やはりおまんこと断端を同時に刺激してのオナニーはとても気持ちいい。もはや私の断端は立派な性感帯になってしまっていて、ここへの刺激無しでのオナニーはもう考えられない。

「ふぅ、気持ちよかったぁ……次はおまんこを指でかき回したいなぁ、事故に遭う前は右手を使ってたから左手でうまく出来るかはわかんないけど……」

「でもそれだと断端をどうやって刺激しようか、顔を寄せれば頬ずりとか舐めたりとか出来るかな……？」

次の予定を考えながら、汚してしまった机の後片付けを始めるのだった。